

目次

星降る夜、
アルル

5

主要登場人物

谷島広樹 大日新聞社会部記者。かつての恋人・柳原文子の死の真相究明に奔走する。

柳原文子 翻訳家。谷島広樹と再会した二日後に死亡。生存中、ある殺人事件を追っていた。

木内靖夫 國広物産社員。柳原文子のかつての恋人。谷島広樹とは大学同期。柳原文子の死を

境に消息を絶つ。

柳原智彦 柳原文子の一人息子。学生。谷島広樹とともに、母の死の真相究明に動く。

相川達也 愛国右翼。歴代総理の知恵袋として活躍。米国、中国に独自の人脈をもつ。同時に、

国内での影響力も絶大で、保守、革新、政財官界、法曹界、マスメディアに知己多数。

品川桃子 相川達也の愛人。女優。熱海にある相川達也の別荘で同居している。

吉良恒夫 広域暴力団・吉良組の次期組長候補。先代組長の養子。

三島十三 相川達也の盟友。熱海在住。

郷原浩輔 与党・民自党所属の代議士。油田開発に絡む疑獄事件の首謀者とみられている。元

暴力団員。

桐山豊水 総会屋。郷原代議士と親しい。

星降る夜、
アルル

織江耕太郎

第一章 文子の死

1

冷蔵庫の中には氷とミネラルウォーターだけが大量にあった。氷は冷凍庫でできる自家製のものではなく、酒屋で売っている形が不ぞろいなものだ。オンザロックには欠かせないが、女房が私の嗜好を考慮して買い置きしたものでないことは明らかだった。ビニールパックされたひと袋を手につくと、その重量感と冷たさに歓喜の声をあげそうになった。じくじくと痛む頬骨と唇に当てれば、こころの苦味は消えないにしても、わずかでも安堵のため息をつくことができる。そう思ったが、女房に見透かされたような行動を執ることは抵抗があった。ほら見たことか。いい歳したおじさんが何してるのよ。声まで聞こえてくるような気がした。

冷蔵庫のドアが閉まる音はとても軽やかだった。その音を聞いて喉の渴きを意識した。傷口は薬で治せるが、喉の渴きは薬では癒せない。もう一度冷蔵庫をあげ、ペットボトルを取り出した。ふたをあけるのももどかしかった。貪るように飲んだ。喉の渴きはびたりと止まった。女房の

自信満々な姿が目には浮かぶ。

私の素行に嫌気がさして実家に帰ったこと、子供二人を連れていったこと、さらには、たった一枚の置手紙で済ませたこと、あらゆることが私には不満だったが、大量の水の買い置きをしてくれたことには、たとえそれがちよつとした嫌味であつても感謝しておこう。

窓の外で子供の声が出た。カーテンをあげると、下の路上で隣の子供がラブラドルと遊んでいた。木蓮の花びらが赤く光つたので時計を見ると、すでに五時を回っていた。

朝帰りして、女房からの三行半みくだらはんの文面にわずかな悔恨を抱きながらも、事態の重みを理解できないまま読み終えてベッドに倒れこんだところまでは覚えていてる。そのあとの記憶は夢だろうか。ほとんど眠らなかつたような気がする。新宿で文子と偶然に出会つたことが神経を昂ぶらせていたのかもしれない。

文子と共有した時間は七時から九時までの二時間。その短い時間に交わした会話、彼女の表情、つけていた香水のほのかな香り、やわらかそうな肌、憂いを帯びた目。すべてが私の記憶に新しい。

夢だつたはずはない。そう思い直して私は居間に戻り、先ほど目を通したばかりの夕刊をもう一度開いた。社会面に書かれたわずか三十数行の小さな記事。信じられないことだつたし、信じたくなかつた。

『四日午前二時ごろ、東京都中野区野方四丁目のマンション敷地内で女性が倒れているのを通り

がかりの男性が見つけた、一一九番に通報、駆けつけた救急車で病院に搬送された。通報した男性はマンシヨンの三階から女性が飛び降りるところを目撃している。女性は、その部屋の居住者の柳原文子さん（45）とみられる。警察は関係者への聞き取りを開始した』

間違いはなかった。同じ氏名の別人が、年齢、住所まで同じであることは、ほぼない。柳原文子は、新宿で二十数年ぶりに再会した文子でしかあり得なかった。

直線的に夕日が差し込む居間で、私はソファに腰を落とし両足を投げ出したまま、わずかしかない事実の断片を整理し始めた。

文子と出会ったのは七時前のことだった。

ネオンがきらめき始めた歌舞伎町をあとにして駅に向かい始めたとき、雑踏の中を歩く女の姿が目に入った。

女は体格のいい男に腕を絡ませていた。右足をわずかに引きずる女の歩き方に見覚えがあった。二人を追い越してから無遠慮に振り返った。

女が眼鏡越しに私をちらりと見た。私は前を向いて歩きだそうとした。二十余年の歳月が思い違いをさせたかと思ったのだ。しかし、私の視線を受けた女はそれがいつもの癖であるかのように、前髪をほっそりとした手で払った。

顔の輪郭が見えた。

読書で削いだような額と三日月形の濃いめの眉毛。その下には近視にありがちな澄んだ瞳がある。その瞳が大きく開き、驚きの色を濃くした。女は何やら小声でつぶやきながら近づいてきた。

「二十三年三か月ぶりってどこかしら」

「そのくらいだな」

と、私は答えた。

風俗店の呼び込みの声を避けながら細い道に入り、目についた焼き鳥屋へ入った。一つだけ空いていたテーブルにつき、はちまきをした店員に促されるままに生ビールとつまみを五品ほど注文した。運ばれたジョッキを軽く合わせたあと、文子は連れの男を婚約者だと紹介した。

笑うと彼女の目尻に二本の皺が走ったが、文子の美貌を損なうほどではなかった。私は彼女から目を離し、婚約者がくれた名刺を一瞥した。

羽田金属株式会社 営業部長代理 山崎宗一郎。厚めの名刺だった。私はビールのしずくがつかないようにテーブルの右端に置いた。

「こちらは新聞記者をしている谷島さん。谷島、何さんだったっけ？」

「……」

苦笑してみせたが、うまくいかなかった。

名前を忘れるくらいの間柄なのだという婚約者へのメッセージならば、それなりの立場を演じればよいだけだ。

私は手帳から名刺を二枚取り出し、二人に渡した。

「あらあら……偉くなったじゃない」

谷島広樹と刷られた名刺をさつと見た文子は、社会部次長の肩書きに注目した。

「その名刺しかないんだ」

「どういうこと？」

文子が訊いた。

「その部署は先日くびになった。いまは社史編集室という、名刺を必要としないところにいる」

「はーん」

文子がやりと笑った。

「それでわかったわ。ときおり不満の山が噴火するってわけね。そして、火砕流を外に思いつきりまき散らす……顔の腫れ、ちゃんとわかるわよ」

私は苦笑した。

「勝ったの？」

「よく見ないとわからないぐらいの腫れなら、勝ったんだらうな」

「でも、あしたの朝、鏡の前で負けを意識させられるかもね」

殴られたところに手を当てると熱っぽく、じくじくと痛みだしていた。顔を歪ませると、文子は笑った。

「正義の喧嘩？」

私は首を横に振った。世の中に正義が存在することを信じていた時期は短かった。正義と不正に境界がないことに気づいたのは早かった。そして正義と不正が等式で成り立つことに気づいたのはつい最近のことだ。

「正義という死語を聞いたのは久しぶりだ」

「相変わらずね」

文子は、はちまきの店員を呼び、私の顔を指差しながら言った。「水をもらえますか、五、六個でいいんだけど」店員は頷いて足早に厨房に去っていった。

似たようなことが何度かあった。殴られて文子がいた店に転がり込んだときもそうだったし、店の客と喧嘩したときもそうだった。相変わらずね、という彼女のそのひと言を聞きたいがために強くもない喧嘩を売り買っていたような気がする。

文子は水を包んだハンカチを私の頬に近づけようと手を伸ばしてきた。私はそれを避けるためにわずかに顔を引いた。妙な誤解をされたくなかった。婚約者は笑って見ているが内心愉快でないことは容易に察することができる。私はハンカチを受け取り顔に当たった。熱をもった頬に心地よい。

「打撲だけのようですね」

私の頬のあたりを見つめながら山崎が言った。

「この人、空手やったから、そのへんには詳しいのよ」

「……空手ですか」

あらためて山崎に視線を移すと、目を糸のようにして笑顔を見せている。頑丈な首回りとからだ全体の骨格は空手よりも柔道の経験者のように思えたが、若いころはスリムで敏捷だったのかもしれない。

「学生時代にちょっとかじっただけです。学校出てからはもうご無沙汰で……練習きついし、痛いんですよ。情けない男だっくてよく言われます」

「でも、大会でいいとこまでいったらしいわよ、ねえ」文子が誇らしげな表情で山崎の顔をのぞき込んだ。「銅メダルだったっけ？」

「個人戦三位。まあ昔のことですけど」

山崎が答える。二人の視線が絡み合った。

「私たちって、二人とも二回目なのよ」

「結婚が、ってこと？」

「そう。この人の前の奥さんは三年前に亡くなつてね。はげましているうちにこの人、勘違いしたみたい。三回忌が終わったとき、指輪をもってきてさ、結婚してくれ、だもん。まっ、いいかって感じかな」

文子は山崎を横目で盗み見ながら、ちろりと赤い舌を出して見せた。

文子の話だと、最初は奥さんの方と親しかったのだという。以前住んでいた下落合のマンションで隣同士だったらしい。

「先週の日曜日に彼女のお墓に報告に行ったの。報告っていうより、お許しを得るためって言った方がいいのかしら……彼女にはお世話になりっぱなしだった。長いつきあいだったのよ。私が前の亭主と別れるころはよく愚痴を聞いてくれたし、きちんと別れてからも何かと相談に乗ってもらった。若いのになかなか歯切れのいい人で」

山崎とその周辺のこと話題の中心を占め始めていることに私は気づいていた。それは文子の山崎に対する思いやりなのだろうと思った。それが私には面白くなかった。左頬に手をやり、ビールを喉に流し込み、煙草を続けて二本吸った。

私は疲れていた。頬骨がうずいてきたことが苛立ちを倍化させた。すっぱりと幸せの衣にくるまれた二人を祝福できるほど大きなころを持ち合わせてはいないし、たとえ持っていたとしても、いまの私には文子たちに寛容さの大盤振る舞いができるほどの余力はなかった。

私の苛立ちに気がついていたのかもしれない。文子が私の顔を見つめた。

「パーティやるんだけどさ」文子は私のコップに冷酒を注いだ。「ごく親しい人たちだけでやるうと思ってるの。あなたも来てくれない？」

「いや、遠慮しておく」

「どうして？ 木内くんも招待しようと思ってるんだけど。あなたたちずいぶん会ってないんじ

やない?」

「居所を知らないからな」

「あら、私だって知らないわ。でも、そんなの調べればすぐにわかるじゃない。大手商社なんだから」

「まだいるのか? あそこに」

「だから、知らないって言ってるじゃない」

文子はおこったような口調で言った。

木内とは大学時代に知り合い、卒業してからも頻繁に会い、新宿界隈を飲み歩いていた。区役所通りに面した小さなバーに足を踏み入れたのは二十五年前の十二月二十四日、クリスマス夜の夜だった。そこに文子がいた。それ以来、私たちはその店に顔を出すようになった。

当時の文子は音大の二年生で、専攻はピアノらしかったが、文子の演奏を聞いたことは一度もなかった。

「才能がないから」というのが口癖だった。バーのアルバイトといえば洗いもので手先が傷つくこともある。すでにそのときには音大を中退することを決めていたのだろう。私たちが知り合った年の翌年、文子は都内にある大学の文学部に通い始めた。

彼女はフランス文学を専攻した。口癖が「才能いらなし」に変わった以外は何の変化もなくバーのアルバイトを続けていた。というよりも続けざるを得なかったというのが本当のところだ

った。その店にとって彼女は必要な人材という以上の存在感を持っていたのだから。文子が店に出るのは週に三日、月水金と決まっていた。その曜日は店に熱気が充満し、逆に彼女がオフの日は閑古鳥が鳴いた。

そんな文子に私と木内はプライベートな誘いをかけ、彼女が応じるようになるまでにそれほど時間はかからなかった。夏は海で遊び、冬はスキーに連れ出した。一つ部屋で泊まったこともある。

そのころの三人の関係は奇妙なものだった。文子を独占したい気持ちはあつたはずだが、色恋沙汰は表には現れなかった。そのことが逆に三人の関係をいびつなものにしていたのかもしれない。

そんな関係にずれが生じたのは、私たちが文子と知り合ってから二年後、桜の葉が濃い緑をつけ始めたころだった。文子は木内のマンションの階段から滑り落ちて近くの病院に救急車で運ばれたのだった。

見舞いに一度だけ行った。文子は「木内さんとのこと、ばれちゃったわね」と言った。

私は二人の関係を全く知らなかった。裏切られたという思いだったが、仕方がないとあきらめるしかないとも思った。もちろん、二人の将来を祝福する気分にはなれなかった。それを境に、私と木内が飲み歩くことはなくなった。

「やっぱり、披露パーティーは遠慮させてもらう」

私と言うと、文子は、そう、と小さな声で応えた。

山崎が立ち上がりトイレに向かった。文子は後ろ姿を目で追いながら「お酒、あまり飲めないの。それだけが不満ね」と言った。私は黙ったまま冷酒を何度も口に運んだ。文子も同じ動作を繰り返し、私たちはお互いの視線を避け合っていた。

「いま、何してるんだ？」

沈黙に耐えられずに訊いた。会って一時間以上も経ってからする質問でないことはわかってた。

「翻訳の下請けとスキューバーの教師」

「かけもちか？ それはすごい」とおどけて見せた。

「あなたもすごいわよ。記者とストリートファイターのかけもちだもの」

「好きでやってるわけじゃない」私と言うと、彼女は「でも、似合っているわよ」と笑顔を見せた。ようやく視線が行き来するようになった。

数分経っても山崎は戻ってこなかった。文子はトイレがある奥の方を何度か振り返る。私は立ち上がった。

トイレに近づくにつれて、いびきの音が大きく聞こえてきた。山崎は便器を抱くようにして気持ちよさそうに眠っていた。抱え起こすと、眠りからさめたようだったが言葉は出てこなかった。左腕を彼の脇に差し込んでしっかりとつかむ。九十キ口をやや下回るぐらいか。死体のような重

みが私の肩に加わった。

文子があっけにとられたような表情で待っていた。

「タクシーはたくさん走っているはずだ」私は言った。「送ってください」

文子は私の目を見ながら頷いた。

夜気にあたったためか、山崎は一人で歩けるようになったが、まだ足取りは覚束ない。私は肩を貸し、文子は後ろからついてきた。

空車が私たちの前に滑り込んできた。

文子が「これ」と、名刺を差し出す。山崎の名刺を店のテーブルに置いたままだったのだ。私は受け取り、ポケットに入れた。

タクシーには「初乗り六〇〇円」というステッカーが貼られてあった。

ふらつく婚約者を先に乗せ、文子は「またね」と言った。

私は右手を上げてドアが閉まるのを待った。しかし文子は乗り込もうとはせず、ぎこちない表情で私を見つめた。迷いの表情が彼女の顔に宿ったがそれは一瞬のことで、すぐに笑顔に戻り、口を開いた。

「あなたにもらった宝物、大事にしてるわよ」

私は彼女にどんな宝物をプレゼントしたのだろう。過去の記憶を辿ろうとしたが、すぐにやめた。意味のないことはすべきではない。

二人を乗せたタクシーは、雑踏と騒音の中を牛のような速度で新宿通りに向かって走りだした。ホステスたちの嬌声を両耳の間で素通りさせながら、私はたまたまタクシーを目で追っていた。文子は長い間リアウインド越しに私に視線を合わせ、ときおり右手を振ってみせた。

何分そうやっていたのだろう。車が新宿通りに近づいたころ車内は闇に包まれた。が、タクシーがウインカーを点滅させて右折しようとしたとき、行き交う車のヘッドライトが二人を乗せたタクシーの室内で交錯し車内を照らした。婚約者の肩に頭を預ける文子の姿がシルエットになって浮かび上がった。

2

夕刊を放り出してから着替えをするために寝室に戻った。きれいな状態のままの女房のベッドを一瞥してから筆筒をあけた。どこに何が収納されているのかわからない。もどかしさに苛立ちを覚えながらもどうにか身につけるものを探し出すことができた。

家を出る前に電話を三本かけた。

最初かけた知り合いの刑事からは新聞よりも少し詳しく、そして奇妙な話を聞くことができた。次に山崎の会社に向け、警備員から彼の現住所と電話番号を聞き出すことに成功した。個人情報報漏洩が喧伝されるいま、幸運としか言いようがないが、こちらも社会部一筋、嘘も方便で仕事

をこなしてきたのだから罰せられない程度の嘘はつける。

早速、山崎に電話を入れてみた。発信音が長く続いただけだった。

最後に木内の会社に電話をしようとしたとき、私は躊躇し受話器を一度置いた。しかし、文字の死を目の前にして木内との過去の軋轢など意味のないことだと思い直した。何よりも悲しみを誰かと共有したいという思いの方が強かった。その相手は木内しかいなかった。

しかし、迷った末にかけたわりには収穫が少なかった。木内がまだ在籍していることだけはわかったが、彼の現住所も電話番号も教えてもらえなかった。自分の名前だけを告げて電話を切った。

外はすでに薄暗かった。私は駅へと急いだ。歩きながら知り合いの刑事の言葉を反芻した。

「ペランダの手すりには柳原文子の指紋だけ。部屋が荒らされていたので物取りの犯行と思われるが、もちろん断定はできない。目撃者が一人いるんだ。タクシーから中年の男と降り立って、二人一緒にマンションの中に入っていくのを、通りがかりの浪人生が目撃している。目撃者は夜食を買うために近くのコンビニに行く途中だった。いま、その中年の男を取り調べている」

中年の男が山崎宗一郎であることは容易に察することができた。

「アリバイはあるのかい？」と問うと、

「ない」と刑事は答えた。

「名前は？」

「いま捜査中だぜ。これ以上言えるわけねえだろう」

当然すぎる流れの中で、私は刑事の物言いに違和感を抱いていた。一つは「ガイシャ」という言葉を使わないこと、もう一つは文子の生死について触れていないことだ。

私の内なる疑問に答えるかのように刑事は続けた。

「柳原文子は消息不明だ。だから生死もわからない」

「どうということだ？」

思わず私は大声を出していた。

「救急車が駆けつけたとき、すでに彼女は消えていた。発見者が言うには、一一九に電話してしばらくするとサイレンを鳴らしながら救急車が来て、すぐに彼女を搬送したそうだ。その後、しばらくして、もう一度サイレンが鳴った。近所の住民の証言でもサイレンは二度鳴っている。つまりだな、本物の救急隊は少し遅れてやってきたということだ」

「偽物の救急車が連れ去ったというのか？ 新聞に書かれてないぜ」

「そんなこと発表できるか？」

と刑事は怒りの声をあげた。

私はさらに何か言おうとしたが、電話は切れてしまった。

西武新宿線の野方駅で降りた。環状七号線にかかる陸橋を渡って反対側に降りると一つ目の角

にコンビニエンス・ストアがあった。それを右に折れ、しばらく歩いた。トラックの騒音が徐々に消えていく。静かな住宅街に入っていた。

あたりの景観とはミスマッチな三階建てマンションが見えてきた。不動産広告だと「レンガづくりの瀟洒なマンション」ということになるのだろうが、レンガ本来の色はくすみ、いくつか欠け落ちていることは暗い中でもわかった。

すでに現場に刑事はいなかった。エントランスの横にはロープが張ってあり、立ち入り禁止の看板が見えた。私は歩く速度を落とさずにそこを通りすぎた。

こぢんまりとした住宅が多い中で、ひととき目立つ豪邸の前にさしかかった。自動開閉の車庫の間口からすると、三台は駐車可能だろう。甘い香りが鼻先をかすめた。ブロック塀のすきまから木蓮がはみ出していた。

その前で買い物帰りらしき主婦二人が立ち話をしていた。

近づいて社名を告げると、一人はまたかというしぐさを見せ、もう一人は逆の反応を示した。私はその女に話しかけた。

「前理事長さんに訊いてみたらいかがかしら」

女は何か含んだような言い方をした。唇の右端が上がっていた。

もう一人の主婦は「あなた、そんなこと……」と、女のブラウスの袖を引っ張った。

「前理事長って、あちらのマンションの？」

「三〇一号室の大林さん」

「どういふご関係なんですか？」

質問には答えてくれなかったが、下卑た笑い方で答えはわかった。

二人に丁寧な礼を言い、いま来た道を引き返した。

コンビニのドアを押したのは店員に話を聞くためではなかった。あることを思い出し、確認するために携帯電話を取り出すと電池が切れていたからだ。コンビニには携帯電話用の簡易電池が置いてあるはずだ。

「間違いねーよ」

コンビニに入るなり若い男の声が聞こえてきた。

カウンターを挟んでコンビニの店員と向かい合っている若者は、金色に染められた髪を無造作に輪ゴムで束ね、耳にはシルバーのピアスを光らせている。

「間違いねーよ。あの人に間違いねえ。何度も言ってるのに警察してしつこいんだぜ。暗いのにどうしてわかつたんだ？ 見間違いじゃないのか？ 後ろ姿だけじゃなかったのか？ ってな。

おれ、あたまきちゃつてさ。でも、反抗的な態度とったら犯人にされるかもってな、心配したわけよ。で、ちゃんと説明したつてわけ。あの日すごく雨降つてたじゃん。雨水を落とすのに、何度も何度も傘を開いたり閉じたりしてたから、真正面から顔を見たんだ」

「犯人はどんな顔してたんだ？ もち、訊かれたんだらう？」

「ああ。でもな、そいつの顔は見てねえんだよ。あの人置いて中にずんずん入っていつちやつたからな」

「ほんとかよ！ 復讐されるのが怖いから、見なかったことにしてんじゃねえのか」

「ばーか。そんなんでびびると思ってるの？ おれがでけえ男を何人病院送りにしたと思ってるだよ」

「ゼロ人だろ」

「違ちがえねえ」

二人はそこで、お互いを見て笑い合った。

簡易電池は文具コーナーの棚にぶら下げてあった。そこから一つを取り、二人に近づき声をかけた。

「あんた、誰？」

男の目に不安の色が混じった。驚かせて申し訳ない、そう言って用件を告げた。

「おう、すごいじゃん。大日新聞の取材だぜ」

店員が叫ぶように声をあげた。

コンビニの隣に喫茶店があった。好きなものを頼んでいいよと言うと、サンドイッチもいいですか、と肩をすくめる。

ウエイトレスが立ち去るのを待ってから私は口を開いた。

「雨は何時ころ降り始めたの？」

昨日私は雨に遭わなかった。文字をタクシーに乗せたときはもちろんのこと、始発電車に乗るために新宿通りを駅に向かうときも道路は乾いていた。局地的な雨だったのだろう。少ししか降っていない所でも天気は大いに違うことがある。文字は折りたたみの傘をバッグの中に常備していたのかもしれない。

「十時ぐらいからかなあ。過去間の終わりかけだったつすから。バチバチという音がしたんです。ヒョウでも降ってきたかと思っただんですよ。窓から見ると大粒の雨じゃないつすか」

「そんな雨の中をコンビニまで歩いていった？」

「なんか疑われてるみたいだなあ。新聞記者って警察と似てるんですね。質問の仕方が……」
私は黙っていた。浪人生は、いや冗談つすよと言ったあと、

「出るときはもう小雨になってました。だから傘も持たずに走っていったんです」

「で、柳原さんを見かけたってわけだね」

「はい。二人がタクシーから降りていました」

「そして傘についた雨を落とした……」

「ええ、そうつす」

「どのくらいなあいだ、そうしていたの？」

「ほんの少しですよ。ぱっぱって感じ」

「きみは小雨になつていたと言つたよね」

「ええ」

「とすると、柳原さんはタクシーに乗る前に雨の中を歩いてたということになるね」

「それは本人に聞いてみないとわからないっす」

浪人生はそう言つたあと、あつと声を出して目を落とした。彼女がこの世にいないことを認め
たような表情だつた。

うつむいたままの彼に尋ねた。

「傘は折りたたみだつたんだね」

「いえ、違います、長い傘。傘の先つぽが長いやつ。折りたたみの先の方つて短いじゃないです
か。あれは尖つていたし——」

文子はある日、傘など持つていなかった。

「連れはどんな感じの男だつた？」

「えーっと、それつて警察でもしつこく訊かれたんですけど、はっきり言つてわかんないんです
よ。暗かつたし、先にマンションに入つていつちやつたし。もちろん、おれも興味ありましたよ。
どんな男とつきあつてるのかなつて。あの時間でしよう。あれから何するのかな、なんてね」

「きみは山崎のことは知らないのかい？」

「山崎って婚約者がいることは警察から知らされたんですよ。おれ、あのひとけっこう仲よかつたんですけど、結婚するなんておれには教えてくれなかつたんです。子供扱いされていたんですよ、たぶん」

「きみが目撃したのは大きい男だそうだけど」

「ええ、肩幅ががっしりしてましたよ。あの体型だと武道っすよ。迫力ありましたから」
婚約者である山崎のからだつきを思い出した。

もう一つ訊いておくことがあつた。それは、現場近くで二人連れの主婦から聞いた大林という男についてだった。私とその名前を出すと、浪人生は笑いながら大げさに手を左右に振ってみせた。

「誰が言ったか知らないけど、大林さんとあの人は関係ないっす。単なる飲み友達。ってゆうか同志ってゆうんですか？ つまりですね、あのマンションは外壁工事のこともめてたんですよ。いまの理事長が業者からの甘い汁を吸ってんじゃないかってね。それを大林さんが暴こうとしていたんです。もちろん彼女も大林さんの味方だったんです。会えばわかります。今度紹介しましょうか」

浪人生の申し出を断り、礼を言ってレジに向かった。

浪人生と別れ、角を左に折れてから携帯電話を取り出した。

経済部の記者に頼み事があつた。文子が乗ったタクシーを特定したかったのだ。

初乗りいくらでした？ と後輩記者は訊いた。記憶を辿って六百円と答えた。タクシーの色合いと車種を告げた。

環七に出た所でタクシーをつかまえ、運転手に若林までと告げた。警備員から聞いた山崎の住まいは、環七沿いのマンション「クレベール若林」、その八〇三号室だ。

大型トラックが吐き出す排気ガスが車内に流れ込んでくる。夕闇の中で車がゆっくりと列をなしている。私はウインドウを閉め、目を閉じた。渋滞に焦っても仕方がない。運転手の世間話が長引きそうなので、黙っていてくれなかと頼んだ。かすかに外の騒音が聞こえるだけになった。運転手の舌打ちが耳に響いたのはどれくらい経ったころだったろう。その音に思考を中断されて目をあけた。車は数珠つなぎでいっこうに進む気配はなかった。私は気持ちを鎮め、手帳を取り出した。そこに挟んだ名刺を裏返しにして、メモ書きされた数字を見つめた。

ロットリングで書かれたような細く横にすつと伸びた筆跡。

あの日、山崎に手渡されたときからあったものだろう。といっても、気づいたのは山崎の住まいを尋ねるために彼の会社に電話をかけたときだったのだが。

店のテーブルに置いたままにしていたためかメモされた数字は一部がにじんでいたが、数字が読み取れないほどではなかった。

数字は七桁だった。

受注個数、アイテムナンバー、見積もり金額、発送先の電話番号、まあ、そんなところだろう。

山崎が勤める会社は小さな会社らしいので、部長といえども営業の第一線にいるのかもしれない。おそらく山崎は間違つて、仕事のメモをした名刺を渡したのだ。山崎に対してあまり好印象を抱けなかった私は、あり得ることだと納得した。

窓の外を見ると、まだ高円寺陸橋を降りきつたところだ。私は時刻を確認し、後輩記者に電話を入れた。

「運がいいですよ」彼は言った。「青木という運転手が乗せたそうです。いまから読み上げる番号にかければつながります」

その電話番号をメモしたとき目的地に着いた。料金を払ってタクシーを降り、雑踏を避けて静かな路地に入つてから青木という運転手に電話をかけた。

文子と山崎宗一郎を乗せたタクシの運転手は二人のことをよく覚えていた。

彼は区役所通りで二人を乗せ、若林三丁目の白い十階建てほどのマンションの前で二人を降ろしたという。料金は女が払った。男は相当酔っていた。車の中で大きいびきをかいていたし、女に肩を借りてマンションの方へ歩いていった。

山崎宗一郎はかなり酔っていた。歩けないほどに。

しかし、これだけでは彼が犯人ではないということにはならない。部屋でしばらく休み、酔いをさましてから、また出かけたのかもしれないからだ。

「変わったことはとくになかったですよ」私の問いに運転手はそう言った。「ずっと背中をさす

ってましたよ。うらやましいぐらい仲のいい二人でした。いい女だし、やさしいし。うちのカカアと大違いだつてね、そう思った記憶があります」

「若林に着くまで、二人に会話はありませんでしたか？」

その問いには、ええ、とあいまいな返事をしてから、思い出したように言った。

「電話がかかってきました」

「女に？」

「ええ、そうです。でも、あいづちを打つだけって感じでしたけどね」

「女の方は全く話さなかったのですか？」

数秒の間を置いて、

「なんだか嫌がってましたね」と運転手は言った。

「無理よ、だったかな、だめよだったかな。とにかくそんな感じですよ。感じのいい女だから、言い寄る男もたくさんいるでしょう」

「そのとき酔った男の方はどうしてました？」

「いびきをかいていました」

私は礼を言つて電話を切った。

文字にかかつてきた電話のことを考えた。無理よ、だめよ——。拒絶の言葉ではあるが、ニュアンス次第で反対の意味になることはよくある。いや、それよりも重要なのは、その拒絶の言葉

には文子と男との関係の深さが示されていることだった。

「クレベール若林」はすぐに見つかった。エントランスを入った所に管理人室があった。窓口業務はすでに終わっている。私は管理人の住まいと思われるドアをノックした。中から太った女性が出てきた。

「運が悪いですよ。ようやく最愛の人が見つかったっていうのに、こんなことになってしまつて。前の奥さんもそうだったけど、柳原さんって人も、それは感じのいい人でしたよ。ついてないのよ……」

管理人の女房だというその女性は、山崎宗一郎の婚約者である文子とも懇意にしていたという。「とっても仲がおよろしくてね。柳原さんがお見えになるのは日曜日が多かったですけど、といても車で出かけられることが多かったんですけどね」

「山崎さんは車を所有されているんですか？」

いまだき車を持っていない方がおかしい。しかし車があればタクシーを使う必要はない。しかもどしゃぶりの雨だ。

「結婚を機に買い替えるっておっしゃってましたよ」

「では、いまは車がない、ということですか？」

「どうでしょう。駐車場見てみます？」

私が頷くと、管理人の女房は厚みのある腰をさすりながら奥の部屋から鍵の束を持ってきた。裏手にある駐車場は立駐形式で、いまの時間には珍しく数台が駐車されているに過ぎなかった。管理人の女房は何度か立ち止まって番号を確認していたが、やっぱりこれね、と上層に白のクラウンが駐車されている場所を指差した。

「ないわね」

クラウンの下に車はなかった。

やはり、タクシーで行くしかなかったのだ。

3

翌日出社したときにはすでに午後一時を回っていた。室内に入ると、パソコンゲームに没頭していたアルバイトの女子大生があわてて居住まいを正した。私は何も言わずその横を通り過ぎて窓の方に歩いていき、風を入れた。春の匂いが鼻先をかすめて去っていく。やわらかな日差しに目を細め、澄みきった青空に浮かぶアドバルーンを見つめた。

「電話ありましたよ」女子大生が言った。「また、電話するって言っていました」

窓から離れ、電話だけしか置かれていないデスクに近づいた。

彼女は目を合わせるのを避けるようなしぐさをした。

著者プロフィール

織江耕太郎（おりえ・こうたろう）

一九五〇年、福岡県生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。

主な著書に、『キアロスクーロ』（水声社、二〇一三年）、『エコテロリストの遺書』（志木電子書籍、二〇一七年。英訳・西訳あり）、『浅見光彦と七人の探偵たち』（内田康夫らとの共著。論創社、二〇一八年）、『記憶の固執』（Zapateo、二〇一八年）、『暗殺の森』（水声社、二〇一九年）などがある。

星降る夜、アルル

2019年11月5日 初版第1刷印刷

2019年11月15日 初版第1刷発行

著者 織江耕太郎

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

TEL:03-3264-5254 FAX:03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266

WEB:<http://www.ronso.co.jp>

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

ISBN978-4-8460-1888-7 ©2019 Orieko kohtaro, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします